



わたしの聖戦

172

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

がん患者の就労

幾つになっても障害があつても、「仕事をする」ということは、人間にとつて欠かせない営みだ。長野県は日本でトップの長寿県だが、その要因のひとつに「高齢者の就業率」の高さがある。考えてみれば、労働によって何らかの報酬を得る行為が、社会参加を実感したり自分の存在価値を見直したりすることになるのだから、就業率の高さは、本人の心身の健康をもたらすだけでなく、その地域の活性化を促すことになるとのだろう。

かつて、がんは死に直結するイメージが強く、がんイコール終末期であった。それが、早期発見の機会が増え、医療技術の進歩と

場復帰につなげようというわけだ。

一見、良い取組みのように思えるが、ことはそう単純ではない。

まず、今やがん治療は通院で行う時代になっている。例えば手術は病院でなければできないが、その後の補助治療（抗がん剤や放



と自体に制限がかかるだろうから、また別の話になる。

このような現実を考える、病院内オフィスの需要はごく小さなものになる。それどころか場合によっては患者に余計なストレスを与えることにもなりかねない。

同じく国の調査、18歳以上の男女3000人へのアンケートで「治療と仕事の両立が困難」と答えたのは64%、その理由のトップは「代わりの人が得られない」「職場の理解が得られない」であった。とすれば、問題は病院内の環境ではなく、職場の理解と柔軟な対応にあるのではないだろうか。

私は2度のがん体験を持つが、いずれも手術のため入院には夏休みを充て、仕事を休むことなくその後の治療を続けた。抗がん剤点滴の後、すぐに移動し講演をこなしたこともある。逆に少しでも安静にしてい

ると、気が緩むのかかえつて吐き気とだるさが増した。無事治療を終えられたのは運が良かった故だと思つているが、しかし気力も不可欠であった。

また、主要な人には病気のことを隠さずに話した。仕事を続けなければ、という思いが強かつたからこそ、しかるべき人にはきちんと話しておく必要性を感じたのである。

がんはもはや死ぬ病気ではなくなった。ならば、治療を終えて社会復帰することとは治療を受けるとともに当面の目標となる。病気になるとついつい甘えたり愚痴を言ったり誰かのせいにしたくなるものだ。しかし、病気を隠すことなく堂々とふるまい、職場・周囲の理解を得ること。まずはその意識が本人になければはじまらない。

その気概はきつとがん治療においても効を奏するに違いないのだから。

イラスト・伊藤栄章